

## 研究発表要旨

### 1. 「ヘケテベケ川中流域の形成期遺跡群の自然遺物」

鶴見英成（日本学術振興会）

発表者は2003年より2005年にかけて、ペルー北部ヘケテベケ川中流域にて、神聖遺跡ラス・ワカスの発掘調査を中心として、先史アンデス文明形成期における社会動態を研究してきた。本発表においては、形成期のコンテクストから出土した自然遺物の分析について、その結果と考察を提示する。資料の多くはラス・ワカス遺跡から採取されたもので、魚骨、軟体動物、甲殻類、種子・澱粉など多岐におよぶ。その分析により、海産資源の利用や根菜農耕など、形成期における当該地域の生業活動の様相があきらかになった。

### 2. 「チャンカイの土器文様」

浅見恵理（総合研究大学院大学）

本研究は、土器に描かれた文様表現から土器製作に関わる規則性を捉え、地域社会の様相を考察することを目的とする。調査対象とした資料は、ペルー・リマ市に所在する天野博物館が収

蔵するチャンカイ文化の土器である。分析方法は、まず幾何学文様を最小単位となる要素に分解し、要素間および要素と施文位置との相関関係を把握した。次に、クチミルコと称される人物像についても、文様の構成要素とそれが描かれる位置を考察した。その結果、土器の口縁部と人物像の頭帯に描かれる幾何学文様に共通性が見出され、またその文様には地域差がみられた。

土器は宗教的イデオロギーや支配者の権力などを表現する手段として捉えられる傾向があるが、一般庶民も含めた共同体のアイデンティティを表象するメディアとしての役割を果たした可能性も捨てきれない。土器への施文が図像ではなく主に幾何学文様であることから、文様の地域性と共同体のアイデンティティとの関連が示唆される。

### 3. 「ワリ成立前夜：ワルバの土器からみたアヤクーチョと他地域との関係」

土井正樹（国立民族学博物館）

2002年に、ペルー共和国、アヤクーチョ県、トリゴバンバ村のワンカ・ハサ遺跡で行った発掘調査により、ワルバに関する良好な資料を得ることができた。ワルバとは、アンデスの編年上、地方発展期、または前期中間期と呼ばれる時期に、アヤクーチョ盆地を中心として栄えたと考えられている社会の名である。同時代のモチエヤナスカと異なり、ワルバに関する調査・研究は、現在に至るまでほとんど行われていない。

しかしワルバは、アヤクーチョ盆地を中心として、中央アンデス各地に影響を及ぼした、ワリの母体となった社会である。ワリ成立の鍵を握るこの社会の実態を解明することは、アンデス文明の展開を考える上できわめて重要である。本発表では、発掘調査で出土した土器資料の特徴に基づき、ワリ成立直前期の、アヤクーチョと中央アンデス各地との関係について述べる。

### 4. 「インカ国家の終焉と崩壊をめぐって」

大平秀一（東海大学）

アンデス地域のクロニカには、インカ国家の拡大をめぐり、数万人の規模で死者が生じた先住民間の戦争・紛争に関する記述が認められる。しかしながら、こうした大規模な戦争・紛争行為が実際に生じたことを明瞭に示すデータは、これまでに遺跡から検出された事例がない。発表者は、インカ国家北方領域の中心都市トメバンバ西方城を対象とした調査において、大規模な戦争・紛争によるインカ国家側の犠牲者を埋葬したと判断される3000-5000基の墓を検出した。これらの墓の分布はアンデス西斜面一帯に及んでおり、紛争の相手として、エクアドル海岸部の社会が示唆される。

遺跡のコンテクストより、この紛争は、同領域におけるインカ国家終焉の主因になっているものと判断される。出土遺物より、この紛争は、植民地時代にまで及んでいたことが明らかである。こうした状況は、文書の記述を基盤として構築されている既存のクロノロジーと合致しないものである。本発表では、2006年度の調査で得られた最新のデータを加えながら、こうした点を議論したい。

### 5. 「テオティワカンにおける長さの単位研究とコスモロジー」

杉山三郎（愛知県立大学）

新大陸で最大級の古代計画都市であったテオティワカンは、中心部に中央大通りと三つの巨大モニュメント建築群、その周辺に他の公共建造物・アパート式住居群が整然と広がっている。古代国家によく見られるモニュメントと計画都市の特性を持つ。都市の中心軸である「死者の大通り」の北端には「月のピラミッド」、その中央には「太陽のピラミッド」が、さらに南には「城壁」と呼ばれる大祭儀場が横たわる。これら三つの主要モニュメントの建設時期にはずれがあるが、紀元後200年以後はそれぞれ増築が繰り返されながら共存していたことが最近の調査で分ってきた。恐らく補完的な意味付けがなされ、儀式の場として、また国家権力のシンボルとして機能していたと想像できるが、それぞれが具現する象徴体系の内容は不明である。長さの単位研究に基づくモニュメント間の空間分析は、ピラミッドや都市自体が時（暦）の概念・天体の運行を表し、それらを包括したメソアメリカ特有なコスモロジーを具現するものだったと示唆できる。本研究発表はまだ予備的な研究途上のものであるが、「月のピラミッド」調査団が近年引き続き行っているトータルステーションによる都市中心部の3D建築図と正確な数値を基にした、3－4世紀の都市構造の解釈の一部である。

## ポスターセッション

### 6. 「光記念館所蔵アンデスの布資料の紹介と展示手法について」

吉井隆雄、竹内健二、稲垣幸祐（光記念館）

光記念館では、2005年7月～12月まで特別展「インカ文明展」を、東京大学名誉教授大貫良夫先生監修のもと開催した。また、他博物館では、「世界遺産　ナスカ展」が開催され、アンデスに注目を浴びている。

古代、プレインカの時代から綿々と受け継がれ、スペイン人が侵入後の現在もおアンデス地域で行われている布の生産。インカ時代には、布の生産量が年間1万枚以上と言われている。その布は、アンデスの雨が少なく、乾燥した気象環境のおかげで、今も鮮やかな状態を保つものが多い。現在、世界各地には、十万枚を超えるアンデス時代の布が存在する。

アンデスの布資料を収蔵している館は、日本では少ない中、当館はプレインカからインカまでのアンデスの布資料を少ない数ではあるが所蔵している。その内訳は、歴史資料―約1000点の内、約半数が中南米の資料（約450点）であり、その内アンデスの資料が約250点あり、そのうち96点が布資料である。

今回のポスターセッションでは、当館所蔵のアンデス布資料について、文化別分類などの特徴を紹介し、実際に展示した布などの展示手法を紹介する。

## 調査速報要旨

### 7. 「月のピラミッドの建造年代について：土器分析から」

佐藤悦夫（富山国際大学）

月のピラミッドは、1998年から始まったトンネル発掘により7期の建造物の増改築があったことが解明されている。土器の分析は、第1期の建造物の下にあり、地山直上の自然堆積層と考えられる第56層から開始し、第1期の建造物から第7期の建造物の盛土から出土した土器までを分析した。

本報告では、それぞれの盛土から出土した土器の時期毎の構成比を中心に各建造物の年代ならびに周辺の建造物との関係について報告する。

### 8. 「古典期の『マヤ低地のボンベイ』とセイバル遺跡の研究」

青山和夫（茨城大学）

マヤ文明のアグアテカ遺跡とセイバル遺跡の調査、特に石器分析の成果について報告する。アグアテカ考古学プロジェクト（1996-2005年）の一大目的は、アグアテカ遺跡の発掘調査で出土した全遺物の分析を体系的に行い、古典期マヤ人の日常生活の様子を研究することであった。810年頃の敵襲によって焼かれた住居跡の全面発掘調査により出土した、豊富な一次堆積遺物の多種多様な基礎的かつ実証的な考古学データをたがいに検証して学際的な研究を行った。第2期調査（2004-2005年）では、第1期調査の研究成果の上に立って、都市周辺部の支配層と被支配層の両方の住居跡の全面発掘調査とさまざまな出土遺物の分析を行い、都市全体における古典期マヤ人の日常生活と社会経済組織の研究を実施した。2005年に調査を開始したセイバル遺跡は、約2000年にわたる政治経済組織を通時的に研究するのに理想的な遺跡である。今後は、セイバル遺跡の調査を中心に行っていく。

### 9. 「チャルチュアバ遺跡タスマル地区2005-2006年調査」

伊藤伸幸（名古屋大学）、柴田潮音（エル・サルバドル遺産局考古課）

チャルチュアバ遺跡タスマル地区において行った2005年から2006年にかけての調査について報告する。タスマル地区は古典期後期から後古典期にかけてチャルチュアバ遺跡の中心となっていた。そこでは、建造物の更新をする際に供物を捧げていた。その一つが北基壇があったと考えられる地点より出土した。その供物は円筒形土器と碗形土器(蓋)から成っていたが、その中よりヒスイ、貝、獣骨がみつかった。これらの発掘調査に関する報告を行う。

### 10. 「ウルピカンチャ遺跡2006年度発掘調査報告」

徳江佐和子・熊井茂行（明治学院大学）

ウルピカンチャ遺跡において、2006年9月から10月にかけて発掘調査をおこなった。これは2005年度に続く第2次発掘調査であり、最終年度である。

ウルピカンチャ遺跡は、クスコ市の東南東約30km、ルクレ盆地のワカルバイ湖の南東側の湖畔に位置する。今年度は、遺跡全体の機能と編年を把握することを目的に調査をおこなった。まず、2005年度発掘区（5つの部屋からなる建築とその周囲の回廊と基壇）の北側にある大岩周辺を発掘し、沐浴場とそこにつながる水路がみつかった。この水路は、2005年度発掘区の東側の基壇内をとおっている。また、アンデネスといくつかのテラスを発掘した結果、最上部のテラス以外、どれもほぼ同じ土の積み方をしており、テラスのいくつかは耕作地として使用されていた可能性がある。また、2005年度発掘区へつながると考えられる、通路や登り口の一部を確認した。

建築には明らかな作り変えは見られない。土器の分析は今後の作業になるが、現時点で時期が明らかな土器は、インカ期のものである。

### 11. 「ペルー、カイエホン・デ・ワイラス、ケウシュ遺跡に見る海岸と高地の関係」

松本亮三、横山玲子、吉田晃章、須藤大輝（東海大学）

東海大学新大陸学術調査団は、2006年8月～9月に、ワラス市北方のケウシュ（Queushu）遺跡の発掘調査を行った。本遺跡は、海拔3500mのケウシュ湖を囲んで広がり、中心部はその南半分、約600m四方を占める。本調査では、中心部東側に位置する高さ24mのマウンド上に設置するチュルバⅠ（基底部で11×15m）の基壇正面部とその付帯建築群、及び西側の建築群と、これに隣接する墓域周縁部を発掘した。その結果、以下のことが明らかとなった。①この遺跡の最古の居住は前期中間期に遡る。②チュルバⅠの建設時期は中期ホライズン初期ないしそれ以前である。③前期ホライズン～後期中間期において、チュルバⅠは土器を奉納されて崇拜され、同時に西側の建造物が作られた。④この遺跡が居住・利用された最終期はチムー帝国期にあたる。⑤ケウシュの全居住期を通して、海岸との関係が、通常の交易関係を越えて密接であったことが、出土土器から確認された。

### 12. 「チュルバに関する一考察-2006年バレドネス遺跡の発掘調査より-」

渡部森哉（南山大学）

先スペイン期アンデスの最後に登場したインカ帝国は、旧大陸の古代国家とは異なるいくつかの特徴を備えている。その一つが埋葬形態である。インカ王のために巨大な墓が作られる個人用。換言すれば、権力が墓によって可視化されることがあった。同様に各地の首長も個人用の大きな墓ではなく、チュルバと呼ばれる集合墓や洞窟墓に他の人物と共に安置されたと考えられている。チュルバとはアンデス特有の地上墳墓を指すアイマラ語である。

問題はこうした埋葬形態がどこまで遡り、それが社会統合の在り方とどのような関係にあるかである。従来は後期中間期チリ北部に起源があり、それが北上して広まったという説と、前期中間期ペルー北部に最古のチュルバが現れ南下したというという説があった。いづれにしてもインカ期にはアンデス各地に広く認められる墓である。

報告者は2006年にペルー北部高地カハマルカ県に位置するバレドネス遺跡を発掘した。その結果、同遺跡が中期ホライズン期の遺跡であることが判明し、未盗掘のチュルバを3基発見した。遺物整理は未了であるが、現在の時点で考えられることをまとめ、作業仮説として提示したい。